宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話 0940(6)1311代
定価 一年送料共 1000円

神具、装束
結婚式場用品
九州店
本社
株式会社 井筒
福岡市博多区東公園一一三一（〒八一三）
電話福岡(092)六五一—九四五六番
京都市下京区油小路六条北入（〒600）
電話京都(075)三三一—三三〇一（代）・三三一—三三〇一・六六番

宗像大社・中津宮・遙拝所

沖・中両宮春季大祭（筑前大島）

去る四月二十八・二十九日の両日にわたり、筑前大島に鎮座する宗像大社沖津宮（於遙拝所）並び中津宮の春季大祭が盛大に斎行された。沖津宮・中津宮両宮の春秋の大祭は、旧暦の三月十五日・九月十五日に斎行されることになっているため毎年月日が異なっている。

本年は、畏くも天長節（今上天皇陛下誕生日）の日に当り、前日危ぶまれた天気も上り、当日は早朝から、春うららかな晴天に恵まれ絶好の祭日にふさわしい日和であった。

当日は、飛石連休とあり、遠近の崇敬者の参拝者、家族連が多かった。

大島へ神湊間の渡海船（弁天丸）も臨時便が増発され、参拝者や釣り客の輸送に当っていた。

沖・中両宮様の春の大御祭りとあって、村内では漁止めを行い、家々の門柱には日の丸旗を掲げて、終日祭り気分に賑わっていた。大祭に先立ち、二十八日午後三時半から地主祭が斎行され、同五時半に沖津宮遙拝所、同六時から中津宮本殿で、それぞれ宵宮祭が斎行された。

二十九日大祭当日には、先づ、午前八時半、村内の東部に当る宮崎区に鎮座する厳島神社で本年の大漁・航海安全等を願う祭典を斎行し、同九時には沖津宮遙拝所に於いて、海上四十数キロに浮ぶ沖ノ島に鎮座する沖津宮に向って、春祭りが斎行された。本年は天長節を祝うが如く、くっきりと沖ノ島が手にとる様に見え、拝むことが出来た。また同時刻頃には、村内で一番高い山頂に鎮座する御岳神社の春祭りを斎行、本年の五穀豊穣・商売繁昌を祈り、農家関係の崇敬者多数が参列された。

同十一時から、中津宮本殿に於て春季大祭が厳粛に斎行された。

御神前には、海の幸・山野の幸

天長祭厳かに斎行

天皇誕生日奉祝祭は四月の二十九日、定刻午前十時、斎服に威儀を正した宇都宮権宮司外神職参列のもと、本殿に厳かに斎行された。権宮の天皇陛下御誕生を寿ぎ、国家皇室の益々の御繁栄を祈念する祝詞が奏上された。この日七十九歳の御誕生日を迎えられた天皇陛下は、きわめてお元気で、イラン、アフガン問題など激動の八〇年代に思いをはせられたのか、侍従を通じ「いろいろ困難もあるが、みんなの努力によって世界が平和になり、幸せにすごせる社会が出来ることを希望する」と感想を述べられた。当日の新聞は報している。又今年は浩宮さまの成人式、皇后さまの喜寿、三笠宮殿下さまの婚約と、およろこびごとが重なり、とくに皇后さまの喜寿については「良宮（ながみや）」が喜寿を迎えたことをうれしく思う。いつまでも元気でいてほしいと、ご結婚五十六年目の年輪をしのばせるこまやかなお気持ちを冠詞で語られた、と記し恒例の一般参賀には七万四百人が訪れ、午前中四回、宮殿「長和殿」のベランダにお立になられた。この中で浩さまが遠慮がちに小さく手を振られたのが印象的だった、と報している。御皇室の御繁栄を心より喜び益々健かにあらせられるよう祈念するものである。

龍宮祭

三連休の初日、五月三日宗像大社中津宮鎮座の筑前大島にて、大島村漁民達の祭典「龍宮祭」が津崎の浜に鎮まります龍宮神社、東区の小倉島に鎮まります小夜島神社、宮崎部落の沖合いに浮ぶ小島に鎮まります宮崎龍宮神社にて、それぞれ斎行された。

当日は漁民の心をくんだかのように晴天にめぐまれ、「叶海上安全、一叶大漁満足」の幟を薫風になびかせた漁船にて各祭場へ向い、多数の漁民の参列のもと祭典が開始され、修祓、祝詞奏上、玉串奉奠と滞りなく斎行され、漁民達は龍宮神へ感謝とともに、今後の海上安全、なぎびと今後の一層の大漁満足を祈念した。

祭典終了後、各々持参神前へお供えした海の幸、山の幸を参列者一同でいただき直会を行って大島村の一層の繁栄と発展を我々の手で誓い合った。

この後、大島漁業組合、又各部落にて、お座が設けられ、この日一日は漁止めとなり、日頃荒浪と戦っている人々も、この時ばかりは漁を忘れて歌に、芸に十八番を次々と披露し、和やかなうちに本年の龍宮祭を終えた。この龍宮祭が終ると、大島にも初夏のおとずれとなり、早植の苗床にツバメの姿が見られ、漁船のエンジン音に合せ、田畑に耕耘機の音が合唱する。タイ網、アジ網も最盛期を迎えいよいよ夏へと装いも新たになってゆくのである。

阿蒙少言

出光興産石布のカレンダーは常に山里神師自筆の一句を載せていることで有名だが、近頃の誌面に「不標巨善信誠他徳」があった。処世上心得ておくべき自戒の名言。現代の報道機関に取扱われる資料は、悉くと言ってよい程、誹謗排斥の対象となる暗いものが多い●明るい面をのぞいてみる。先ず職業的の使命感とその完遂精神に生きる医師助産婦を挙げる。金もつけ主義と非難される病院もあるようだが、それは極めて小数の例外的のもので、名利を眼中におかない野英世流の根性も見られる●離島の診療に自らモーターボートを操る医師、急患の場合もあるからと自ら航空機を操縦して馳ける先生もある。失礼ながら離島の病人は大底貧しい。医薬の無料給付と同時に、食料の進呈まで付く。栄養食を摂らねば医療効果が見られない。当人は鼻にかけていないが、仁術は生きている。使命感は躍進している●特にいやなのは、親に治療してくれた医院に反発す事訴訟の醜悪さを曝け出す場合で、神様でない人間では仁術の使命感は貫けない。汚い納屋同然の病床を足蹴にする医師が去ったあと、薬袋と栄養食を押し戴く老人間性と宿る他徳を讃める心、それが社会の動乱期や国家の危機に、志士一人の壮挙となった歴史も、己の妻を称えるのでない美しさがある。大阪の町役人だった天塩平八郎は、貧しい群衆に同情して遂に暴徒の指揮者となった●スパルタ王レオニダス、僅かの手兵と共にテルモピレーの峡に拠ってギリシャの大軍を迎えて散った足跡は今も輝いている●わが国の森末の変動期にも多くの志士仁人が命を捧げて奔走した。使命感を貫くことは、未路がどんな結末となっても、喜びの己が美であろう。（白雲）

論説

動物愛に絡む信仰

――イルカ救護と肉食――

沿岸近海の漁場を荒らすイルカ保護か、生活のかかる漁民の収獲護かの国際論議は一昨年以来続けられているが、問題は性格上容易に解決は困難である。しかも国自然保護団体のメンバー・ケイトは、論議の中心地壱岐勝本町に四度目の来訪で、遂に網を破ってイルカを逃がす直接行動に敢えてなす暴挙に出た。当に暴挙であり、許し難い。イルカの被害に泣く漁民の生活は考えていない。

ケイトの一方的な主張は噴飯もの、イルカは海の主人公で人間が割り込んだとする点は、独断的であるばかりでなく、ハワイやアフリカで高校の海洋科学の教師をやった彼の心情は狂信的でもある。その狂信的の直接行動は看過できない所だが、彼が米国人である以上漁民も抱している。

宗教の型には当てはまらない信仰が、彼のイルカ保護、漁民の生活無視の根底に集喰うと考察する。「牛や豚は人間に食べられるために存在する」とは、勝手な言い分も甚だしい。イルカは魚を食ってよい、イルカはいくら食ってもよいから、人間は自粛し漁獲制限をせよとは噴飯ものである。

彼のイルカ保護に共鳴する者は、欧米人二百人が居るという。一種の宗教的な言い分、しかも常識あるものにとっては狂信的とさえ見られる態度に、何百万もの賛成者があろう筈がない。

仏教であれキリスト教であれ、一神教の社会では世界に唯一の神の許に凡てが従う。この唯一神を否定したり反対することは、何人とえども許されない。一神教社会では、まことに白黒の明確な社会現象である。

仏教関係の禁断も明確をこよなく尊重する。その徹底した生活態度は、史上の名僧善知識に見られるが、現代に於て感服する仏教者として、数年前九十六才の高齢で亡くなった妙心寺管長古川大覚師が挙げられる。

二十才になるまでの青少年時代肉食した大航師は、母親から仏教者肉食不可の教誨を受けた。師はこの時以来他界するまでの長い人生に、一度も此の教誨に背かなかったのである。

死去の数年前、二人の弟子を伴なって宗像大社に参拝されたことがあった。弟子はともに七十才余、大社で昼食の準備する旨を伝えると「私らは黒でも何でも平気ですが、師の坊は小留の梅林寺で用意していますので、それまでご辛抱になりますよ」と笑いながら答えた。ケイトにこの生活信条があろうわけはない。

牛羊の群を飼育してその飼料牧草を求めて移動する遊牧民族を狙とする欧米人に、キリストが鳥獣殺戮を是認したのは当然である。それに比して列島の海岸線に沿って定住し、魚介海草を常食する日本民族には牛羊殺戮も草原移動も起らなかった。むしろ家畜愛護が続いてきた。牛豚殺戮は明治以降の国風欧化によるもので、欧米人は科学明とともに、タンパク源を牛豚から摂らし始めるものである。一面ありがたくない国風欧化と言えよう。

わが国民にとっては水産資源は、国家民族の命運にもかかわる大切なことだけに疎かにはされない。工業国として鉄鋼器機車輌等の飛躍的の増産を見る今日、幾分の憎悪も加わって捕鯨にまで強い制限論が現われはじめた。

そして米国の如きも、自国のマグロ巻き網漁がわが壱岐周辺のイルカ捕獲よりも遥かに大量のイルカを殺戮しているのに、それは棚上げして壱岐非難の矛先だけを日本に向けるのである。

いかなる国と雖も、偏向的独善的な他国非難は許されない。その後、米国副領事が壱岐を訪れイルカ猟切断の暴挙を託した。

もし日本人の動物愛護グループが、米国各地の牧場に潜入して牛豚の柵を破壊し、食肉の倉庫店舗の出入を不能にしたなら、彼らは野蛮人の狂信と痛罵するだろう。牛豚は殺して食べてよい。イルカは人語を解し人類に最も近い動物だから、近海の魚群を襲って食ってよい。その論理が国際的に通用するなら、文明も科学もすべて否認しなければならない。

何千年来自国沿岸の漁獲によって生活してきた海洋国日本、そこへ現れて狂信的独善的な言動が漁民を泣かせることの暴挙とも考えない悪党は、どんな美美麗な名称を冠するグループであっても退治しなければならない。

（白雲）

第三六回 宗像大社歌会詠草

毎月一日〆切　詠草到着順

古賀　吉武　邦夫
暮打つ目のはしことめなるやや暗き庭一隅の三椏の花

吉留　高山　信子
あきらめて帰りかけたる足ととめ鴎外呼び給う墓にぬかづく

須恵　早川　フサ
くさぐ〻の山菜に桃の花添えて山深き友の訪ねくれたり

曲　天野トモヱ
山路に採り来し植える場所絵を描くこと庭に選べり

福間　広渡一寿軒
せり摘みに土堤行く幼児疲れしか泣きつつ遅れ母に縋りつ

津屋崎　内田　久美
娘孫等旅立ちし夜を吾れ一人降り初めし梅雨の雨音きゝおりかな野英世流の根性も見られる●離島の診療に自らモーターボ

田熊　今村　重刀
新婚の記念の古き柱時計金婚過ぎしゆ見守る

武丸　原田まつ代
草刈ば土筆も混る可憐さと春訪れし彼岸晴れ奈里

原町　八波　五月
献血はや用なさぬ老二人せめて協賛のサインして来ぬ

戸畑　田中ハツセ
珍らしやさし言葉かけてをり今朝は目さめの清しき矢か

宗像　中村　幸
おづおづと柄杓に汲みぬ神池の出湯は熱く苦く塩っぱき

田熊　吉田　直志
鴎のさて温き窓辺に歌よめば庭木にこもり囀しきり鳴く

東郷　田中　春子
台詞長く妻の立場を言ひつのる夫婦のドラマ来と見てをり

田熊　今村重刀
春うらら吟詠のつどい堂にみちて吟じうたた櫃賢を想ふ

津丸　藤田　肇
二分咲きも満開の桜も重密より眺めしのみにてこの春終る

箱崎　吉村　三郎
こもるに励ますことくに鳴く海を無時を渡る雪の淋しさ

日の里　清原　絹代
春近し朝をテレビ体操する手先の感触に心なに気ずく

名古屋　野崎　傳三
富士壷のたた付くたこ壷揚げ乍ら日間賀の島に船を待ちをり

田久　立花　勇雄
花のもと席をしきて酒を酌む群めぐり踊る翁嫗ら

池田　永富　臻
身に泌みて淋しきならむと妻を詠みつづける君を思ふ

田熊　鷲津かつ代
春いまだとともにはすしてアカンヤの並木の花にさむき雨降る

武丸　原田　リノ
ぶり返へす寒さに痛むわが脚を立ちてはさする坂となる道

田島　吉武　武雄
兄さんと呼びし夢が戦死せし雨戸打つ風吹き月淡し

深田　中野　節子
灯ともさぬ球をつらねし長賊釣り船色彩豊かに出漁を待てり

東郷　藤崎　辰子
耳遠くなりたる母の傍に寄り昼の炬燵にしばらく眠る

田久　小方　実
かりそめにも政治不信なと思ふまじ古古米捌くニュース見てゐる

田熊　力丸　一郎
高校の野球にかけし若人の戦ゝ気迫吾につたわる

福岡　吉田　信夫
母がするに真似ではなら試品を中学生のつぎつぎ食べる

鐘崎　村田　四郎
岩肌の嘴穿にすがりて咲きさかる浜撫子は海に向いて

武丸　立石ろせ乃
咲らざる汝の行末を思ひ乍ら白髪の目立つ齢となりて

田島　楠　理
幾十年使い慣れたる鬱の柄は手脂浸みて色艶の良き

香椎　桜井　ツ子
白鷺のただ一羽のみ浅き瀬に己が影をひきしばし動かず

大井　吉田ますみ
日ねもすをたゆたう浪の音を聞く春の一日を悲哀の島来て

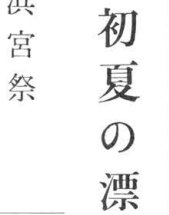
津屋崎　内田　久美
今更に聞くにあらねいの間に節くれ立ちし太き吾が右手

神郡に初夏の漂い

五月祭・浜宮祭

風薫る五月五日の子供の日、当社摂月宮で五月祭、神湊浜宮に於ける浜宮祭が午前十時より斎行された。この五月祭の由緒を見ると今から六百年前、応安年間宗像社祭事記録によれば、五月宮は五月の浮殿と呼ばれ、海中に社殿が設けられていたと想察される。五月五日には「浜殿五月会天神事」が行かれたと記している。五月会とは、宗像三宮の御輿と許斐神社、織幡神社の御輿がこと五月宮の浜まで神幸して盛大な祭りを執り行ったとある。この神幸の次第を、吉野期神事目録は「五月五日、行幸、第一、第二、第三、織幡、許斐、伊摩明神、浪折明神、黒尾明神、神興五丁、五社行幸、神馬、乗騎御神十社」と記している。

またこの神幸の列次は、大鉾、円布、小鉾、祢宜、諸郷神人、右座大夫貞主、貫主、権官、御興、社務、右座神官、大夫貫主、貫主、権官、国侍の順で編成され、郡内各部落から輿興子を奉仕したとあり、威儀物奉持員多数の郡民が奉仕した神郡あげての大祭であったことが窺える。五月会大神事は、元来端午の節供の祝祭であるが、本来の皐月、即ち早苗を植える信仰が重なり、この日に田植、田築三年の大洪水に依り、社殿と共に一切の施設を悉く流失した。その後領主黒田家第四代の藩主左衛門佐黒田光之朝臣が時の郡奉行大森善右衛門に命じ当社を新に復興に新築御遷座した。爾来寛延六年・宝暦八年・寛政三年・文政二年。



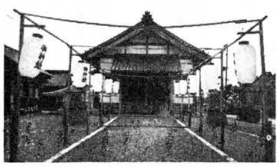
五月祭終了後、葦津宮より、この五月祭の重儀由緒の挨拶があり参列者一同、連綿受継の大切さを感じつつ、直会の席についた。

この五月祭が終れば、神郡には田植の準備が始まり、一面の水田に早苗が影を浮べながら夏へと木々も緑を濃くしてゆく。

五月の空に輝く千木

「摩利支神社」

若葉薫る五月三日、宗像郡宗像町東郷の里「榎田」（エノキハタ）に鎮まります、「摩利支神社」が装い新たに本・拝殿が総工費四千万円をかけて竣工した。この摩利支神社は、朱鳥五年（約一千四百年前）時の宗像大領、秋黒氏、郡の中央地東江郷（現東郷）に「天之御中主大神」を奉斎し後に開運、勇武の神（摩利支明神）を合祀して現在「摩利支神社」と称するようになった。と神明帳にある。代々郡中の人々は勿論宗像大宮司家や黒田家の崇敬厚く御供田等の寄進も多かったが、元禄十三年の大洪水に依り、社殿と共に一切の施設を悉く流失した。その後領主黒田家第四代の藩主左衛門佐黒田光之朝臣が時の郡奉行大森善右衛門に命じ当社を新に復興に新築御遷座した。爾来寛延六年・宝暦八年・寛政三年・文政二年。



とそれぞれ、時の郡奉行の司により、再建又は修復が行われた記録が残されている。その後更に明治二十二年頃より郡内外の氏子の浄財により境内の整備拡張が行われ同三十五年地元の篤志家、川島田造氏の御寄進に依り現社殿が造営され今日に至っている。しかし現社殿も老朽化著しく諸祭興にも支障を来す状態になって来たので、今度、中村侃宮司を中心として、長田中孫十氏、副会長吉田藤雄、米田彦市両氏を初めとする「摩利支神社復興奉賛会」が生れ、今日、ここに立派な、本殿（木造銅板葺二・二五坪）拝殿（木造瓦葺二四・〇〇坪）玉垣（木造銅板葺）が新築された。大和民族発祥以来三千年の輝かしい伝統を誇る敬神崇祖の精神復興の一助になれば、との願いをこめて設立され努力された「摩利支神社復興奉賛会」と氏子の方々の協力により社殿の拡大改築が終り、ここに御遷座祭を迎えた。新らしき社殿前には藤の花も美しく、参拝の老若男女の波は宵暗に浮ぶ提灯に照らされて、とだえる事なく続き、境内の露店の客呼びの声も一段と高く、鎮守の森にひびき、神人和楽の響にあふれていた。

「織幡神社」

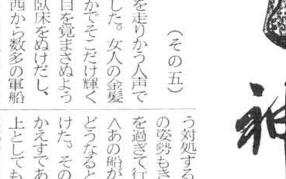
沈鐘のロマンを伝える伝説の里鐘崎に鎮まります織幡神社は、今春、総工費、三千七百余万円を以って神殿の改・新築工事を終った。

拝殿は鉄筋コンクリート造、屋根銅板葺、内部木造新築並びに社務所、境内各諸修理が行われた。

花田国五郎総代会長を中心として氏子総意により昨年初めに開始された工事も一ケ年の工期を以って見ちがえる様な、境内に装いを変えた。百数十段の石段中央には、ステンレス手スリが走り、昇降参拝者を案内している。

新緑の森にへんぽんとひるがえる巨幕旗の白と赤が目にいたい様である。銅板に光る金色の社紋、森よりも尚く輝く千木にも、氏子の方々の喜びが感じられる。

境内より目下に見える港には、大漁旗が船影をおおい、まぶしく輝く玄界灘は、五月の風に眠っているかのごとく、大祭に賑う鎮守の森を写していた。



祭儀部雅楽特訓始まる

秋の大祭に向けて、鳳笙、篳篥、龍笛三管の合同練習が始まった。神島祭儀課長の指導のもと、新入職員を中心とする雅楽の練習である。雅楽と祭式は祭興の両輪をなす重要性を含んでいるだけに、神島権祢宜の指導はきびしい。拍子の取り方に始まり、各管の持ち方と、教者、受者の間にはピーンとした空気が流れていた。練習曲は、越殿楽、五常楽急、難徳と進み、来る秋の大祭々典には一段と美しい楽となって参拝者を魅了し神人和合の姿を見せるであろう。境内に流れる曲にはまだ幼稚さあるが、今後の練習によって、参拝者の足がふとまるのも遠い日ではない。頑張れ新入、修業は苦しいが、修めた時の嬉びは自分のものなのだ。修めた曲に舞う巫女の姿を想い浮べるかの様に持つ楽器にも一つの流れが見える様な練習である。一管のみでは奏することの出来ない雅楽であるからこそ、合同演奏の大切さが求められ、そこには、鳳笙が篳篥が篳笛が一つとなって、太鼓の拍子にのりながらメロディーとなって流れるのである。週二回の練習であり、又全員が一堂に会しての練習は、なかなかむずかしい。だから、練習には一段と力が入る。秋の大祭が楽しみに待たれる練習風景である。

馬鹿と鋏

馬鹿と鋏と書けば、馬鹿者と対象的によく斬れる鋏と解いて智慧者と踏み易いが、この場合の鋏は馬鹿グループに近い斬れない鋏を指している。「馬鹿と鋏は使いようによる」との俚諺の省略で、洋諺の諷訳ではない。

おなじみ江戸芸談の産物である。ちょん髷もやや毛が薄くなった大番頭は、帳場に控えて、多くの丁稚小僧に命令を下す。老舗の夕暮風景と見ればよい。

丁稚小僧の仲間に長幼の序列があり、入店の前後の別もあって、その制約は厳しい。汚れ仕事と重い運搬はどうしても新米弱輩に押しつけられて、不当不満はあっても抗議背反は許されない。

現代の職場意識からは想像も及ばない時代色があった。出身地も江戸周辺の農漁村が主であって、休日がない。勝手に親兄弟にさえ会ったら、後に番頭の大目玉が雷か。今日の労働組合に当る組織、週休二日、賃上げスト、いずれも夢のような話とすら言えない。尤も、握り方力の入れ方も関係する。

これで鋏も馬鹿も割り捨てなくて浮かわけ。この因果関係を人間自体の人生とか幸不幸とに飛躍して、今日のねじ鉢巻赤い小旗がなさせて、哲学的宗教的の構想に発展する風景など想像の及ぶ線上にはなく、馬鹿も鋏も埒外にあった。

脳味噌が少々凡以下の人間でも、どこかに長所もあろうから、よくその性格や特質を捉えて策を施せば役に立つ。十分とはゆかなくても子クの棒よりはましである。鋏は何寸かの刃先の中の、斬れる部分と駄目とがあり、斬れる部分の刃先に当ると役に立つこと経験が教える。尤も、握り方力の入れ方も関係する。

これで鋏も馬鹿も割り捨てなくて浮かわけ。この因果関係を人間自体の人生とか幸不幸とに飛躍して、今日のねじ鉢巻赤い小旗がなさせて、哲学的宗教的の構想に発火点を転換してみた。わがまま勝手論と敢えて命名しておく。

先ず近来学生の卒業式ごとに、ジャーナリズムの興味本位の賛否論が記事になる国歌「君が代」。この歌詞は古今集に読人知らずとして載せられている。これほどの手論と敢えて命名しておく。

先ず近来学生の卒業式ごとに、ジャーナリズムの興味本位の賛否論が記事になる国歌「君が代」。この歌詞は古今集に読人知らずとして載せられている。これほどの民会体を聖天子の御子として君と共に一体不可分の国柄を表現しているもの。国民不在の聖天子のみの千代八千代の発展多祥が、わが国柄では考えられない。それにとかくの論議を沸かせたいのが現代病であろう。

経済事情が要求する量産も、種々の悩みを抱えて現代病の列に入るそうである。コスト貨銀が鋏のごとくに、昔のような職人の手作りに頼るわけにゆかないが、斬れ味博多に今は隠居暮しで仕事なし鋏職が居る。いくら金を出しても、手作りの鋏は出さない。ところが気心の好きな人には、折々丹念の手作りを寄贈する。代金や物質面のおれなどは一切受けつけない。よく斬れると感謝されるだけが嬉しいのである。この手作りなどは使いようによって、馬鹿同様に左右されることはない。

馬鹿と鋏は、頭髪の薄くなる年期を積んだ番頭のコツが物を言うが、世相の語るどんな事件も殆んどが金もうけに端を発している。贈収賄・密輸・脱税などみな浮世の汚れを昏めつくしたようなベテランの工作。これを摘発する当局の腕前は、悪党ベテランを侵ぐものでないとやれぬとは思えない。それは金もうけの悪業自体に完璧がないからである。

大学の不正入試事件が、毎年のように入試時期の新聞テレビを色どるが、学問教育に生命を打込み潜んでいない事実が明るみに出る。汚職にも手下手がある。官庁の高級官僚は、江戸芸談の大番頭格なろうが、部下に馬鹿も斬れ味の悪いのも居るのを使う腕前はあっても、公金をこまかして宴会費や海外出張費を捻出する妙策なき潜んでいない事実が明るみに出る。

残筆しがらみ草紙 (40)

玄陽隠士

水軍（その五）

払暁、館の中を走りかう人声で明継は目を覚ました。女人の金髪が湧ありのなかでそこだけ輝くように見えた。目を覚まさぬように気遣いそっと臥床をぬけだし、様子を窺った。西から数多の軍船が上ってくるという。急いで身仕度を整え櫓に登ると、義弘が黙って海面を二度指した。見おろすと旗幟をなびかせた船団が東へ進んで行く、甲冑であろうか綺麗で時折り朝日にきらめくもの明継は、義弘の防備を固める兵かという。義弘は昨夜のうちに蒐集した情報を詳細に語ってくれた。「予期せぬことだが鎌倉にいる関東管領足利氏満が急逝したそこで東西呼応して倒幕の軍が蜂起するのを恐れている朝廷は大内討伐に全力をあげることとなった想像どおりに絶海津が堺に大内義弘の上陸をうながす使者として赴いたが、どうやらこれが発端をしたらしい早々に追い返されてしまった。絶海の報告をうけた幕府は直ちに兵を泉州堺に進め昨日の朝から戦さが始っている。氏満の子満兼は執事の上杉朝宗に抑えられて動きがつかめず、土岐・山名両氏の差金もとうやら失敗におわったらしい。急をきいて次弟の弘茂が援軍にかけつけているのかあの船団だ。兵は三千、しかし有勢な幕府軍には抗すべき術もなかろう。諸国に兵火があがれば幕府も兵力を分散し危いが堺ひとつならば踏みつぶすのに雑作もなかろう」聞き終って明継は、いま眼下を通り過ぎる船に照覚の乗っていぬことを祈った。大内義弘・弘茂の兄弟が戦死をしても山口にはまだ長兄の盛見がいる。幕府がこれにどうの対処するか、これによって宗像の姿勢もきまると判断した。視界を過ぎて行く船団を見つめながら人あの船が合戦に間にあわぬ時はどうなると思う〉と義弘が問いかけた。その時は多分、領国に引きかえすであろうが、そうなれば村上として見逃しては幕府に対し不都合となろうが如何なる積りか〉と感じると、〈それを最も案じている。双方にとって益のない戦さはつまらぬこと。僧の予測では折角、堺まできた弘茂を幕府はおめおめ領国に帰させはしまい。必ず懐柔し、これを利用して山口の盛見と争わせるであろう。領国を飼にちらつかせば若い弘茂など骨肉相喰む愚を犯す相違ない。今頃幕閣では絶海中津あたりが中心になって相談の最中だろう〉と言って高らかに笑った。なるほど、その様な考えも出来る。それにしても何という洞察か明継は昨夜からの対話を幾回となく繰り返し心中驚嘆し、素直にそのことを語ると、照れくさい気な顔をして〈当代では無双の策士と思っても評判の高い貴公から賞められて恐れいるが、先年より領国を捨て図南の志を抱いた時からの姿勢もきまると判断した。褒界を過ぎて行く船団を見つめながら人あの船が合戦に間にあわぬ時はどうなると思う〉と義弘が問いかけた。その時は多分、領国に引きかえすであろうが、そうなれば村上として見逃しては幕府に対し不都合となろうが如何なる積りか〉と感じると、〈それを最も案じている。双方にとって益のない戦えぬよう厳命し、続いて図南の計画を説明し来年中に第一陣を出発させると語った。家人が下った広間に義弘と明継が残った。〈聞いての通り来年から事を運ぶことにした。ついては貴公のことだが、村上の所有する船の全てと貴公とを引換えに貰いうけようと思うが如何かな。僧のみたとう宗像殿は小国ながら兵は強く、民は豊かな暮しを営んでいる。ここ二代や三代で他から侵されることは先ずあるまい。貴公もそろそろ身の振り方を考える時期と思うが〉と〉諺々と説く義弘の言葉を聞いて、明継はひとつの時代が過ぎるのを感じた。先刻、櫓から眺めた船団が今後なにをもたらすかは解らぬが、所詮自分とは関りのないものの様に思えた。南海に新天地を拓く望みは大きかったが、反面病床のすばるのこと弟正夫妻のことを想うと絶ち難い人間の絆を感じずにはいられなかった。

こうのかなと湊 神 (95)

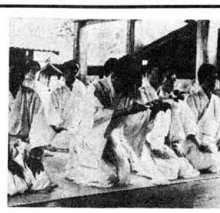
楠早鳥作
福田長庵画

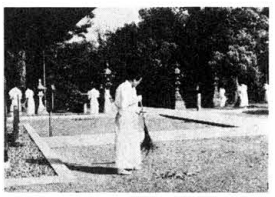
またいっぽう流浪の身を拾いあげてくれた民俗への義理も思わずにはいられなかった。大陸にある頃にはなかった屈折した心の動きに明継は戸惑った。何が原因だろうか瞬時の頭脳の回転は宗像の風土を描きだした。霞のかかった神苑、雨に煙る山河、蒙昧のなかに凡てのものが貯えられていた。

出光興産㈱店主室
第20期生宗像大社研修終る

楢若葉色の境内に白衣胴姿で早朝より清掃する人々が見られた。これは、出光興産(株)の店主室教育受講者二十五名の人達で、本社研修を終え、最後の精神研修になるものがあった。各人帰社され送られる日常生活の中に、この大社研修が何らかの姿で心中に影響するものがあると信じ各位の御活躍と御多幸を祈りながら若葉の中より励まれる姿である。麻生室長の引率のもと、日本民族の心を学ぶべく始まった、この宗像大社研修も、早くも二日目を迎えた。午前六時起床に始まる一日のスケジュールは午後十時の就寝まで、各行事で一休の間もない。白衣白袴はもちろん、はくタビも初めてと云う人々にとって正座、禁煙の日常生活が、いかに苦しいものであろうか、拝殿で行われる就寝前の鎮魂の姿、浄暗にうかぶ白き姿は手を合せるほどに美しい。ここに真の道、民族の進むべき姿を見る思いがする。

樹間に響く拍手の音にハット現世に帰す様な厳しさがあった。四月二十二日より二十五日までの三泊四日の研修であったが、その内容には、奉仕する我々も学ぶべきものが多かった。各人帰社され送られる日常生活の中に、この大社研修が何らかの姿で心中に影響するものがあると信じ各位の御活躍と御多幸を祈りながら若葉の中よりバスを見送った。





玄海町無形文化財指定
主基地方風俗舞保存会総会を開催

三月三十日、ここちよい春風がそよぐ境内は桜花もちらほらと咲きほころび、家族連れの参拝が目立つ今日、昭和十四年度の総会を当社斎館に於て開催した。

当日は伊豆善也県会議員(同会顧問)、蓑津国彦氏(同会顧問)玄海町議会議長、田中教育長等多数の来賓を迎えた。

田中富樹会長、当社蓑津宮司(同会名誉会長)の挨拶と続き、岩佐昭正副会長を満場一致で、議長に選出、議事進行がなされた。

先ず、昭和五十四年度決算報告では、先に行なわれた会計監査の結果報告が中野行雄監事より述べられ一同了承、予算へと運み無事審議を終了した。

本年度から玄海町より多額の助成金を賜わり、今後保存会を運営していく上で大きな支えになるものと思われる。

特に本年度は美神楽視察を始め、各方面で広く活動、研修等を進めていく予定である。

宗像町庁舎新築を記念して
「田心姫」神像立つ

宗像郡宗像町東郷の宗像町役場の一階ロビーに当社御祭神の〝田心姫神〟の立像が立てられ、四月十四日除幕式が行なわれた。

この立像は、宗像農協が地元の城山中学教諭で県美術協会員の白石隆幸さんに依頼、二百万円をかけてこのほど完成したブロンズ像で、町役場の完成を記念して寄贈したものです。

高さ二メートルの御影石の台座にすえられた二メートルの立像は、勾玉(まがたま)の首輪に古代衣裳、榊を手に持ち、うつむきかげんの姿である。白石先生は、学生時代に目展(彫刻)に入選され、これまで目展入選七回の実績をもっておられる。

田心姫神は、天照大神の御子神で、玄界灘の孤島、沖ノ島の沖津宮に祭られている。

立像は、見る人々に神神しい印象を与え、神郡宗像にふさわしいものである。

祖霊社社司
笠井国枝氏退職さる

当社剣使館横の森の中に干木が見える、これが祖霊社である。

この祖霊社の笠井国枝社司(八十才)が四月三十日を以って退職されました。笠井社司は、昭和三年、今上天皇御即位の御大典の時、当時の官幣大社宗像神社の幡掛宮司に望まれて、小倉裁判所検事局より宗像神社出仕として神明奉仕なされて以来五十有余年の御奉仕生活を送られた。昭和十六年祖霊社の社司に着任されてより今日までの四十年間には、大変な御苦労をなされたと聞くが、笠井社司さんの顔にはいま一つの務めを成し終えた喜びと悟りに満ちた笑顔であった。八十路の道を辿り来て今はるかに小倉を返り見る満足がうかがえた。社司を送る境内には落葉一つなく、塵目もすがすがしい、ここにも社司さんの清浄心を見る思いがする。名も知らぬ紅葉樹が一つひとき わ春の日に輝きいちまつの林しさを感じさせていた。

又後任者には、大島村の前教育長を務められた、越智四愛氏が着任されると聞いた。笠井様の今後の御健康と御繁栄を祈り、越智様の御奉仕により御社頭益々の御清栄を合せお祈り申しげます。

笠井国枝様、ほんとうに長い神明御奉仕御苦労様で御座いました。

プロフィル

戸高　八徳(とだかはちのり)

宮崎県西臼杵郡千穂町の出身二十三才、独身、両親の八徳の願いを受けて世に出て来とり、すくすくと成長して、身長、一七三センチ、体重七〇キロの堂々たる偉丈夫、「ひえつき節」に送られて、国学院大学に学び、文学部神道科を卒業した。両親の人生学、一生に八つの徳を得よ、との言葉を守り、第一歩の奉仕人生のスタートをこの宗像大社で切った。彼の今後の活躍をおおいに期待したい。

趣味　スポーツ全般、特に野球
レコード鑑賞。

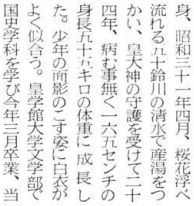
玉木　正之(たまきまさゆき)

三重県度会郡は大宮町岡四の出身、昭和三十一年四月、桜花浮べ流れる五十鈴川の清水で産湯をつかい、皇大神の守護を受けて二十四年、病む事無く一六六センチの身長五十六キロの体重に成長した。少年の面影のこす姿に白衣がよく似合う。皇学館大学文学部、国史学科を学び今年三月卒業、当大社に奉職、彼の活躍が待たれる独身です。

趣味　野球、卓球、読書。

渡辺秀丸(わたなべひでまる)

大分県豊後高田の出身、豊後武士を想わせる好男子で、当年二十七才の独身。熱田神宮学院に学び、神明奉仕に努力している。一七〇センチの長身より打ちこむ剣には、凄味があり高段者をも時々ハットさせるものがある。



大城佐予子(おおきさよこ)

文武両道を信条とする彼も、面をとれば、良き九州男児。五十五キロの体重を白衣白袴でつつみ、頑張りながら、宇都宮稚宮司の指導を得て、少年剣道の指導にあたっている。

趣味　剣道(初段)、野球、読書。

私は白い着物と赤い袴という姿にあこがれ、又神様のもとでお仕えするということに喜びを感じて巫子になろうと決心しました。宗像大社には毎年秋祭りの時に遊び来ていただけに親しみを感じています。私は小学校の五年生の時からバレーボールと親しんできて、今では時々ですけど青年団のバレーボールクラブにも顔を出すようになりました。成長が盛んな時期に飛び跳ねていたからでしょうか私は人より身長が高くなってしまい複雑な気持ちです。

今度初めて、お茶とお花を習うことになりました。前々から興味深く思っていましたので楽しみにしています。今まで飛び跳ねていた私ですので続けていけるかわかりませんけど、ここで落着いた女らしい精神が養なわれればと思っています。今一番の夢は何年か後に友達と外国を旅して回るということです。その為に英会話も練習したいです。毎日毎日がはりのある明るい生活になるようがんばりたいと思います。

信仰

神輿(みこし)

「みこし」というと神輿(みこし)にもあたり、古くは天皇・皇后様などの場合にも用いられたが、今日では神輿の意味に限られる。すなわち神幸(或は渡御)にあたって神霊を安し斎場へ渡すときに用いる輿(こし)である。

今日では、木製で黒漆塗りに金具を多く打ち、屋根・胴・台の三部から成り、形には四角形・六角形などがあり、台には二本の棒が通してあって、これを輿丁が肩にあてかつぐのが普通である。しかし日本造りの素木なものも現に用いられているから、形式にはうつりかわりがあり、次第に豪華なものとなった。

古伝によると、奈良時代、東大寺大仏建立のとき、宇佐の八幡神を迎えるにあたり、紫色の輿を用いたということであるが、これは古くても江戸時代の製作にかかるものが多く、河内の誉田神社には鎌倉時代、紀伊の丹羽都比売神社・態野速玉神社は室町時代の製作と伝えられるものが残されているのは、珍しい例である。

もともと神霊の御動座は人馬の背によったものであった。今日でも山間部落において、神職が背負って斎場へ運ぶ例もあり、また京都の賀茂御祖神社の御蔭祭のように馬を用いる例もある。したがって、古来、神輿を持たない神社もあったわけであるが、「みこし」が出ないと「おまつり」の気分が出ないというようになったのは、神幸が「まつり」の重要な部分と考えられたり、なるべく賑々しくすることによって神慮を慰めようと考えたりするようになってからの現象である。

しかし今日残っている習俗にも、国府祭(または総社祭)などと称して、数社の神輿が一カ所に集まったり、「みこしあらい」などと称して、神輿を河や海の中にわざと入れたり、また、は暄祭などと称して神輿と神輿とが競走したり、ぶつかり合ったりして、血の雨をふらさないとおさまらないというのもある。

神霊が荒魂(あらたま)であると、一見して乱暴と思われるような現象を呈することが多い。また神幸の途中、神輿民家に突入することも見られるが、これを縁起がよいとよろこぶところもあれば、平素の不信仰を叱られると恐れるところもある。また神輿をかつぐ人々も、自分等の意志は、どうすることもできない「力」によって左右されると信じている。そこで神輿の動静によって神意を伺うが、或は一年の運勢や景気をうらなったり信仰も生れるようになった。

神楽(かぐら)

一般的には、神前で神霊を慰めるために演じ奏せられる舞踊・音楽と解するのが普通である。今日各地に残っている神楽には何種類かの系統があると考えられるが、明確に分類することは難しい。ことにその発生・伝来をさぐりとめることはほとんど不可能に近く、残っている型や作法や順序などを比較して、大体の系列を類推することができる程度である。

神楽と称せられるものの、最も通俗的なのは、門付芸ないし寄席芸化した太神楽(だいかぐら)で、曲芸・軽業の要素が濃く、宗教的な色彩はほとんどうすれてしまっている。しかし本来は民家を戸ごとに訪れて、盆・正月の祓をとりおこない、家内安全を祝福し、火伏せ・悪魔払などをするためにほどこされる呪術的な為で、その意義・舞踊が主要素とされたわけは、これによって鎮魂(たましずめ)という大切な手続きが行われるからであった。

意義・舞踊といっても、きわめて単純・簡素なものであり、簡単な一定のリズムをくりかえすことによって精神を統一し霊(かみがかり)状態に入り、神威の発動をうながして神の託宣(おつげ)をうけたりするのであった。すなわち舞踊・意義は単なる手段にすぎなかったということができる。それが神慮を慰めるためとか神人和楽のためとか説かれるようになるほど、舞踊・意義の方が発達・複雑化し、むしろそれらに重点がおかれるようになり、ついには余興化されてしまったわけである。

以下次号に続く

〔お知らせ〕

(王将戦、集れちびっ子)

早くも、第三回を迎える宗像王将戦が五月二十五日(日曜日)午前八時より、当社斎館に於て開催されます。年毎に参加者も多くなり、かずかずの白熱戦が話題を呼んでいますが昨年の升田九段に続き今年は、大盤解説に、米長邦雄王位(九段)を迎えての王将戦です。審判長、米長王位(九段)、副審判長、橋原五段が務められ、各県より予選で勝ぬいた代表選手福岡県南・北の四名と各県二名並びに第一期王将者の計七名により、トーナメント方式により王将の争奪戦が行われます。尚「宗像王将戦」優勝者には日本棋院連盟より五段免状が授与されます。これに併せて催される「ちびっ子王将戦」が毎年人気を呼んでいる。今年も腕自慢の小中学生の多数参加を待ち致します。又一般観戦者も大歓迎です。申込は左記の通りです。

とき　五月二十五日、午前十時
申込　ハガキに学校、学年、氏名、電話記入のうえ目将連福岡支部へ申込み下さい。
連絡先　福岡市中央区春吉三丁目二三一一博栄ビル
日本将棋連盟福岡支部事務局
伊藤節男宛
TEL　〇九二一七七一一
〇九〇八

(菊花会)

●第十回西日本菊花大会
主催　宗像大社菊花会
後援　福岡県・県農協中央会・門鉄局・宗像農協
期日　十一月一日・同二十二日
出品地　福岡・山口・佐賀・長崎・熊本・大分各県
出品数　約三千鉢
●第十六回・全日本菊花大会
主催　全日本菊花連盟・宗像郡町村長会・宗像青年会議所・宗像大社菊花会

(宗像大社歌会)

当社歌会では、会員の親睦と研修を目的とする「互選会」を毎月一回左記要領にて開催致しております。各位の参加をお待ち申し上げます。

記

「互選会」＝毎月一回、第三土曜日午後一時、於、当社斎館。
講師　中村　吾郎先生。
投稿日＝毎月一日〆切、〝互選会〟と明記のこと
「宗像誌草」＝毎月本誌に掲載
「短歌」「俳句」と別記し、〝宗像誌草〟と明記下さい。
※誌草は必ず「標書」で記し、月名を明記の上、毎月一日までに投稿願います。
宛先　福岡県宗像郡玄海町
宗像大社歌会係

(宗像大社歌会)

期日　十一月十日
出品・審査・表彰
十一月十一日・十二日
一般観覧
後援　福岡県外
出品地　全国各地
出品数　約四千数百鉢

—お便より—

なつかしい宗像誌ありがとうございました。みどりのふる里の便り拝見いたし心ばかりの御礼を申しげます。私共が六年生制度になって第一回卒業でしたので、しばらく田様の裏側の高等小学校フジク補習学校へ津丸から二里の道を通った楽しいおもい出を持って居ります。大井川の水のふえた時困った事など。

〝渡米せしは六十余年の前なれどなほ忘れぬはふる里日本〟
浦野　薫

一九八〇年四月一日

右記の便りが編集部に届きました。差し出し人は、デンブァー・コロラド八〇三〇二に お住みのミセス・カオル・ウラノさんでした。遠くふる里を離れ、アメリカで生活しておられる浦野さん。お元気に御過し下さい。御健康と御多幸をふかりお祈り申し上げます。

宗像大社歌会 俳句作品集（二〇八）

藤沢玄洋子
辺津宮の森にかぐわし楠若葉

久留米　入江　柳江
知られぬ地蛾の中の麹坊主

福間　広渡一寿軒
海戦の記憶も遠し砲の音

田熊　力丸　一郎
ランドセル背に新しき四月かな

東郷　有吉　春子
火渡るも善男善女つゝじ山

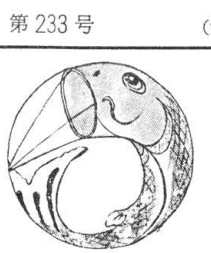
田熊　安部　ゆき
花冷やこけ人形寄り添ひて

名古屋　野崎　傳三
法の師も鑑徹の手入れに法衣脱ぐ

田島　吉武　武雄
木の芽和え盆重ね舌鼓

名古屋　野崎　傳三
雪の富士窓におさまる甲斐の宿

久留米　入江　柳江
遊園地遠く近くの鯉のぼり



海の寄物

台湾からのビラ　いしいただし　（最終回）

昨年の九月はじめ、宗像郡津屋崎白石浜の、波打ち際に、青天白日旗を印刷したビニールが数枚ちぢれていた。ビニールは二種あって、一枚は縦一九・二センチ、横八・八センチの長方形、もう一枚は縦七・八センチ、横一〇・三センチである。

前者は中華民国第六任総統蔣経国先生とかれ、青天白日旗を背に、メガネをかけた人物（蔣経国氏）が印刷され、裏は、上が青天白日旗、下に中華民国、中央政府宣伸…光復大陸後、除少数頑抗的元凶首悪外と青インクで印刷され、次に赤インクで、保護、不殺、不問（罰）不究既往とある。字の周囲は梅花で縁取られている。小さい方も、表に青天白日旗、裏に反共復国行動綱領第五条、大陸光復後、除共党之元凶首悪外一律不殺、不問、不究既往、並封原属中共之軍人、以及「復良軍人和「民兵」妥予安置照顧、同享平等待遇。

これらビニールビラは、このままではなく、何か容器に入れられたものにちがいない。

十一月の中旬、九月と同じコースを歩いたが、白石浜で高さ一四センチ、直径八センチのプラスチックの容器が流れ着いていた。容器には把っ手が付き、丁度、ジョッキみたいである。全体はエボシガイが付着していた。いままで、あまりプラスチック類を手にとることはなかったが、エボシガイが付着していたのと、何に使用したのだろうと思い、蓋をあけてみたら細状のどろどろしたものに混じって、九月に漂着したビニールビラが入っていた。ビラは前記のものより更に小さく、縦五・四センチ、横七・八センチ、表に青天白日旗、裏に「毎一個脱離魔掌向自由的共党馬天人員、就都是国民革命的志士仁人」と印刷されてある。

プラスチック容器の蓋には福の字が、底部に梅花がついている。梅花は九月の時のビラに縁取られているもの と同一の図柄である。この種のビラが、このプラスチック容器に入れられていたことがわかる。更に容器に残されていたどろどろになった細状のものは、紙が長期間の漂流で、海水が入って糊状になったものであろう。

ビラを入れたプラスチック容器はその後、玄界沿岸でいくつも漂着したが、三種類あり、ジョッキ型が二種、把っ手のない小形のものが一種である。色は蓋がすべて赤、全体は青、みどり、黄色等の目につきやすい色がほどこされている。

今年二月、海の中道で漂着した高さ八・九センチ、直径一〇・二センチの小形プラスチック容器に入っていたものは、ビラが六種類で、全部で三十七枚あった。幸福的家庭、先明的前途七枚。死不改的、走資派九枚。中華民国第六任総統蔣経国先生七枚。ミグで逃亡してきた人達の生活九枚。台湾での自由な生活をうつしたもの五枚。宓（密の略字ではないかと思います）資料四枚。これらは台湾での自由で明るい生活をカラー写真で紹介されているし、カーター大統領と中国首脳の風刺マンガもある。恐らくこのビラは、中華（台湾）民国の金門や馬祖島あたりから中国大陸にむかって流されたものが、はずれて、黒潮にのり、東に対馬暖流に分かれて、玄界沿岸へ漂着したものであろう。国連での地位を失ない、アメリカからも見放された中華民国の前途は厳しいものがある。中華人民共和国への復帰、帰属のどちらかであれ、現体制が崩れることにより、カンボジア・ベトナムと同じような悲劇が予測されるのではあるまいか。

七月年六月、遠賀郡芦屋町芦屋浜に漂着していた水色のビニール製の蓋（縦一六センチ、横八センチ、形状からみて、文房用具の一部ではないかと思われる）には、平和という漢字、まんなかに鳩が、下にハングル文字がかかれてあった。二つの体制に分れ、同一民族が争わなければならなかった朝鮮は、南北統一という"平和"は民族の宿願であろう。やぶれた文房用具の切れはしであったが、私はじっとそれを握りしめていた。

——◇——◇——

いま世界は、アフガニスタン、イラン問題と、米ソ超大国がからみ合った「戦争」という大きな危険をはらんでいるといえよう。

寄物というロマンを求めた浜歩きにさえも、厳しい現実の姿を目にし、考えさせられることも多い。平和への祈りをこめて、私の浜歩きをここで終わりたい。

長らく御愛読いただきました「浜の寄物」も今回第三十三回をもって終了致しました。

六月号より、石井忠氏の"宗像考古学散歩"が始まります。宗像郡内の遺跡を資料にもとずき、実際に歩いての考古学記事です。古代へのロマンを求め、併せて宗像の古代の謎に挑戦します。

"宗像考古学散歩"御期待下さい。

宝物館だより　宝の蔵から

神宝館も仕切の段階に入り、それに伴なって宝物館のお化粧直しも行なわれ、随分見違える。

博物館も「見せる」という点では何らデパートと変わるところはない。だからこそ、展ノ様に細心の注意を払うし、人を魅きつけるポスターも貼る。ショーウインドーのディスプレイが、博物館の展示である。多くの人に見てもらうという姿勢を、「展示」も常に保たねばならないのだが——。

といって、博物館では漠然と眺めていたって仕方がない。展示されている物は、考える人にのみ語りかける。たとえば、この宝物館にある沖ノ島の出土品。美しいもの、ガラス玉や水晶玉や金の指輪などは、何も考えなくとも目に飛込んでくる。が、所詮ガラス玉に現在の美術価値はないし、金の純度だって高くはあるまい。それが人々の目をひくのは、二千年という実感を越えた時の流れを、見る人が意識しているからである。一歩踏み込んで何の目的ガラス玉をつないだかと考えれば、古代祭祀の問題を、またどうやってガラスを作り出したかと考えれば、考古学的な学の問題をと、それぞれに多くを語りかけてくれる。だからこそ、入館者を眺めていてはいませんからといったいが、宝物館の現状では、申し訳なくてそんな偉そうなことはいえない。

展示は陳列とも羅列とも違う。違わせねばならない。「見せる」ことに終わってはいけない。デパートでは見せて、次に買わせることを狙うように、博物館では物との対話を可能にする展示を行なわねばならない。展示の苦労は、まさにここにある。

ともあれ、博物館の主体は展示する側にではなく、見る側にあることを繰返して、今は全てを神宝館に期すこととしよう。

鐘崎民俗誌　その二十二

楠本記

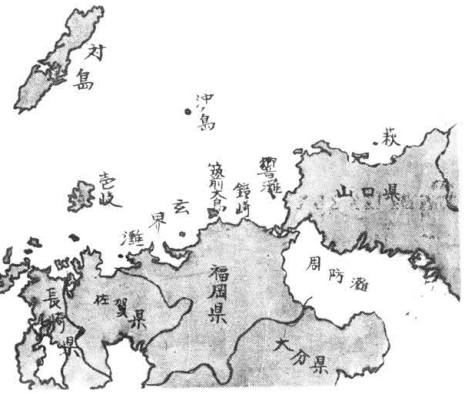
沖ノ島にて

先月三十一日から沖ノ島勤務についている。玄界灘の真只中でも呼世の風は吹き荒ぶ。夜が明けるごとに無線電話で新編集長から、原稿を送れ送れと矢の催促、悪いことに帰って書けばよいと思って資料を全部自宅において来ている。今日は帰りの予定はとっくに過ぎて十六日め、明日は迎えの船が来ると云うが、帰って即座に原稿を手渡さねば必ずやしっぱられる。前編集長の氏は人物が温厚なお方だったと、孤島で独り懐しく偲ばれる。

「鬼」イノチアッテノモノダネとほの暗い電灯の下で鉛筆をなめなめ記事を書いている。

「沖ノ島さまに漁に行くときゃあヘコから何かを全部かえて行ったもんばい」と花田国一郎さん（明治二十八年生）は言い、大島の河辺タキノさん（大正三年生）は「子供の頃、母が家族から離れて後ろ向きで食事をしている時がよくあったので、不思議に思って尋ねたところ、お父さんがオイワズサマに漁に行っていなさる時、赤不浄になったので火を別にして食事をしているということでした」と語る。他の浦々では沖ノ島に関る習俗はなかろうかと一昨年から各地を訪れては話を聞いているが日本海沿岸では島根県の浜田くらいから沖ノ島を知っている事が解った。

山口県は萩市、長門市では海図の名称通りに呼んでいるが、豊北町の矢玉港ではイワズと呼び、網納一をしていた老人が「あの島はタカガミサマじゃけのう、あそこの近くで妙なことすりゃあ剛があるでよ」と話して呉れた。また萩市から連絡船で三十分ほどの海上に浮ぶ六島の長岡三男さん（昭和二年生）は「わしらの所の年よ語ってくれた。これによって沖ノ島に礼帆の習俗があることが解った。矢玉港より南は殆どイワズオイワズ・オイワズサマと呼びこの自用は忌詞の段階で、それに伴なって宝物館のお化粧直しも行なわれ、随分見違える。



りから聞いたんじゃが、爺さんら鉢巻をとって拝んだそうじゃ」と言われ、これについては大島の越智四郎氏（明治四十三年生）が—私が三十数年前に島の古老から収録した時には五十数種類あった事を記憶している—（註二）と言われるように特殊な用語としては数の多いのが注目せられる。これは海上で働く漁民が四足物とか爽や蛇を口にすることを忌んで使わず他の代用語として用いていた神言葉であろうが、それにしても単語が多いのには驚嘆する。怖らく沖ノ島を舞台にした専用漁場にしていた大島、鐘崎の漁民等が用いたものであろうが、忌詞の多いのは、この島にたいする畏敬の念の強さを物語っている。

沖ノ島に滞在すると、よくもこんなに諸処方々から船がくるものだと感心する。四月二十一日から五月六日まで十六日間の日誌を見ても

山口県　仙崎　萩

の話をしたところ船と女性の関係はヨーロッパでも同様であるとのことである。

また島では忌詞を用いていたと言われ、これについては大島の越智四郎氏（明治四十三年生）が—私が三十数年前に島の古老から収録した時には五十数種類あった事を記憶している—（註二）と言われるように特殊な用語としては数の多いのが注目せられる。これは海上で働く漁民が四足物とか爽や蛇を口にすることを忌んで使わず他の代用語として用いていた神言葉であろうが、それにしても単語が多いのには驚嘆する。怖らく沖ノ島を舞台にした専用漁場にしていた大島、鐘崎の漁民等が用いたものであろうが、忌詞の多いのは、この島にたいする畏敬の念の強さを物語っている。

沖ノ島に滞在すると、よくもこんなに諸処方々から船がくるものだと感心する。四月二十一日から五月六日まで十六日間の日誌を見ても

福岡県　鐘崎、大島、玄海島、西浦、唐泊、小倉
長崎県　壱岐、対島、五島

の浦々の船が沖ノ島に停泊している。この外、島の周辺で沖ガカリをしている船を数えると、どれくらいの船が沖ノ島周辺で操漁している見当もつかない。

私が調べた範囲で一番遠くからきた船は昨年いか釣にきた山形県の酒田の船が北端で、南端は熊本県天草のかつお釣の船であった。酒田の船も天草の船も獲物を追いながら、とうとう沖ノ島まできたという話であった。漁民の漂泊性を物語るよい例である。

このように沖ノ島についての漁民の信仰習俗には、かって海人族の伝統がよく凝集され保たれていると思われる。

註一、古くは岬の先端に祭られる神の前を航行する時、帆を半ば降す礼法があった。ここで半旗とこうの は恐らく海軍の用語を用いたものであろう。

註二、宗像大社沖津宮祭祀遺跡昭和四五年度調査概報—四五頁

大島捕鯨資料　その九

一役員給料ヲ定ムル如左
会計掛　壱名　月給金三円宛
幹事　壱名　月給金参円五十銭宛
書記　弐名　月給壱名ニ付金弐円宛

一役員投票資格左
幹事　河野幸作
会計係　中村清三
書記　目原伊三治
企　遠藤仙作
量係　遠藤孫十
企　遠藤　右衛門
企　目原七平

一持船給料借賃壱箇月三円宛四十七年十一月十八日ヨリ四十八年三月三十日迄破壊ニ及ビ候節ハ金三円ニテ賃上ヲ申ス約定持主阿蘭清作

一客員宿所ヲ定ムル如左
社長代理別当八壱人ニ付一日給料拾銭宛　宿所　遠藤仙作
銃手三名壱人ニ付一日給料金十銭宛　宿所　船越時次郎

一捕鯨商社事務所借賃壱箇月ニ付金三円宛　宿所　大島弥十郎

一水夫金作欠乏ニ付目原弟次郎ヲ以ゼニ元ツ十七年旧十一月十五日ヨリ十八年旧三月三十日迄月給金参円宛分ニ日玄米壱升宛ヲ支給ス約定

一羽指取以下水夫迄十三人ニ支給スベキ塩噌料八壱人ニ付玄米壱合宛ヲ支給ス約定

一羽指取以下宿賃並器械□□借賃壱箇月金五円宛　宿所　佐藤道介

一加代浜受料鯨壱頭ニ付弐円五十銭宛交付スベシ但シ十七年旧十一月ヨリ十八年旧三月三十日迄ヲ限ル濱主佐藤兵市

一通常浜売渡定価ヲ定ムル如左
臓物赤身八壱□入
うねすの之茂鯨八五□入
余八一切入ル
余トハをばいけたつ□の類
右ハ鯨ノ種類如何ニ関セズ

一鯨半部ヲ以受渡株主ニ配布スベキ株数ハ十口ヲ限リ一口金五十円ト定メノ株主□□□□ノ部分□□ベシ但シ株主ニ対シテハ現価ノ三割ヲ入ル尤十七年ノ組加ヨリ十八年春ノ組揚迄ヲ限ル

一株金浜渡之方法ハ鯨ノ捕ト不捕トヲ問ハズ十八年旧ノ四月限リ捕鯨商社ヨリ返却スベシ

一加代小納屋（二間、三間）之建物建築料金三円　之約定受主安部弥三郎

一水夫米作欠乏ニ付村井統ヲ以ゼニ元ツ旧十七年十一月十七日ヨリ十八年旧正月三十日迄ヲ限ル月額金二円七十銭宛一日ニ付玄米壱升宛ヲ支給スベシ

一賞与規則ヲ定ムル如左
魚見立　金壱円
壱番銛　金六円
弐番銛　金四円
弐番銃　金四円
浮魚鼻切　金七十銭
浮魚鼻綱　金五十銭
沈魚鼻切　金壱円
沈魚鼻綱　金七十銭
右ハ波座主銃手水夫ノ別ナリ其術ヲナンタルモノニヲ賞ス

壱番銛乗組掛取工　金四十銭
壱番銛乗組水夫壱名ニ付　金三十銭宛

第弐番船
金参円　波座主
金弐円　銃手
金弐十銭　掛取
金五十銭　水夫
但シ弐番銛ヲ突カズ亦銃ヲ発セザルモノ

右ハ定尺（脊見座頭）四尋三尺長須拾弐尋以上本魚賞与之例ニシテ本尺ニ満タザル座頭長須ハ壱割ヲ